
私のごく普通の恋愛話

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のごく普通な恋愛話

【Nコード】

N72070

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

友達少なし、成績良し、恋愛っ気なしで高校一年の宮野悠はごく普通の生活を送っていた。特に今の生活に不満があるわけでもなかったのだが、ある日ひょんなことから学校内で女子に大人気の綾瀬春（男）に勉強を教えてもらうことになって…。まったりゆったり進む王道（？）恋愛ものです。

第一話（前書き）

ゆったり進みます。

第一話

今日も東京の空は青く澄んでいる。

私は頼杖をついて窓の外景色を見ていた。

図書室内はしんとしていて、あいている窓の外から鳥の羽ばたく音が聞こえる。

時刻は3時半。

高校1年の私はこうして毎日この時間に図書室を訪れることが日課となっていた。

大好きな本に囲まれて、外から入ってくるそよ風を肌に感じながら静かなひと時を過ごす。

それが、友人と遊んだり家で好きなことをしているより好きだった。友達は少ない。成績は上の下。恋愛っ気は皆無。それでも私、宮野悠は今の生活に満足していた。

「ねえ、聞してる？」

ずっと窓の外に気を取られていた私は、彼のその声で室内の空間に引き戻される。

正面を見ると先輩が苦笑しながら私の事を見ていた。

「あ……っと、ごめんなさい」

「いいよ、別に。少し休憩しようか」

そういうと先輩は静かに席を立ち、廊下にある自販機のもとへと歩いて行った。

彼の名は綾瀬春。私より二つ上の高校3年生だ。

「学園のアイドル」とまでは行かないが、格好いいと騒がれている人間のうちの一人である。しかし漫画の世界のように運動神経がずば抜けて良いわけでもなく、生徒会にも入っていない。けれどもそ

の優しそうな笑顔にほとんどの女子は虜なようで、彼の隣には必ずとっていいほど女の子が一人はくっついて歩いている。笑顔が格別良い男、それが綾瀬春だ。

それで何故私とその綾瀬先輩と共に図書室にいるかというと、私が彼に勉強を見てほしいとお願いをしたからである。時をさかのぼる事四日前、学食に居た私はよそ見をしていた綾瀬先輩と衝突し、味噌汁やらお茶やらを派手に被ってしまった。すると先輩がそのお詫びに何かをしたいと言って聞かなくなってしまったので、半ばあきれながら勉強を見てもらうことにしたのだ。

大事なことだからもう一度言うが、私に恋愛っ気などない。

「ただいま、宮野さんは休憩しなくていいの？」

数分してコーヒーを片手に帰ってきた先輩が向かいの椅子に座った。

「はい、大丈夫です」

そう言って愛想笑いをしたが、正直もう帰りたい。

数学とは本当に理解不能な教科だ。生物とか歴史とかは叩き込めば覚えられないことはないのだが、数学だけは本当に点数が取れない教科だった。外国語専攻の私でも理解不能な言語のうちの一つだ。こればかりは好きになれない。

「だからこの角度は30度になるね、そうするとコサインは？」

「えっと……0.86……で合ってますか」

「うん、正解。じゃあ今日はここまでにしようか」

先輩の「今日は」が少々気になったがとりあえず数学の呪いから解放されたかったので私は何も聞かず手早く片づけを始めた。消しゴ

ムをしまつて、机の下に落ちたボールペンを拾ったところで私は先輩の視線に気づいた。顔をあげてみると、先輩は頬杖について私を見下ろしている。

「そんなに急いで片づけなくてもいいのに？」

そういうと先輩はまだ机の上に置いてあったシャープペンシルを私に手渡した。

「ありがとうございます」

「この後は真っ直ぐ帰るの？」

そう言いながら先輩はマフラーを首に巻いた。

カーディガンにマフラー、加えて美男とくると整いすぎていて少々目のやり場に困る。

「はい、でも駅前の古本屋にだけ寄ろうかなと思ってます」

漸く帰る支度が出来たので私は席を立ち、先輩にお礼の言葉を言つた。

結局内容なんて明日には忘れているのだろうか。

先輩も「いいよ、もとはと言えば僕のせいだし」と言いながら鞆を肩にかけ、頭を掻いた。

それからごそごそと鞆の中から一枚の紙を取り出すと、私に手渡しながらこういった。

「あのさ、僕も着いて行っていかな？ 本屋」

「え？」

午後5時半ごろ、私は先輩と二人で駅前の本屋へと向かっていた。当初の予定では先輩とは図書室で勉強を見てもらった後解散するはずだったのだが、彼が本屋のチラシを持っていたものだから、結局二人で行くことになってしまった。

しかし、何と言ったって私たちは昨日今日会ったばかりなのだ。駅までにかかる時間は約15分なのに、お互い言葉が口から出る気配が全くない。そっと隣を歩いている先輩の横顔を覗きこんでみると彼は何やら進行方向にある何かを見ようと目を凝らしているところだった。

気になってその視線の先を追ってみると、そこにいたのは私と同じ学校の制服を着た女の子だった。

「ちょっとだけ先に行くね、ゆっくり歩いてきて、本屋にはいきたいから」

そういうと先輩は早足で彼女のもとへ歩いて行った。

本屋なんて一人で行けばいいじゃないかイケメン、と思いながら私は歩く速度を落とす。

けれども着々と前に進んでいるという事実は変わらず、だんだん先輩と話をしている女の子の顔がはつきりと見えてきた。

「羽鳥さんかな？　好きな人って先輩の事だったんだ」

羽鳥琴音、同じクラスの女の子だ。

私はあまり話をしたことがないが、大人しい感じの女の子であまり口数は多くない。一度だけクラス内に好きな人がいるとかいう噂が広まったがあれはデマだったようだ。

「あ、手紙……」

顔を真っ赤にさせて手紙を渡す羽鳥さんが見える。先輩はそれを無表情で受け取ると鞆の中に入れた。それから二、三の言葉を交わしたのちに羽鳥さんは走り去り、私は先輩に追いついた。

「ごめんね、行こうか」

そう先輩が言ったのを合図に私たちは再び歩き出した。

「文庫本セール、今日までだから丁度良かったよ」

先ほどの出来事は無視するような話し方をしたので、私もそのルールに則った。

ところで、何の疑いもなく先輩の同行を了解した私だったが、文庫本セールは昨日までだった気がする。まあ、嘘を吐く理由もないだろうし、仮に嘘だったとしても、私にはあまり関係ないことのように思えた。

「そうですね。先輩もよく使うんですか？あの本屋」

「ううん、僕はたまたまチラシ持ってただけだよ。本当は紙飛行機にしようと思ってた」

弾みそうで弾まない不安定な会話をしながら私たちは駅まで歩き続け、とうとう目的地の本屋に到着した。

第一話（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

恋愛小説なんて突発以外は書いたことなかったので試行錯誤です…。のんびり更新していきますのでよかったですら次話以降もお付き合ってください（´∀´＊）

悠…恋愛に疎いというか、自分にそんなに魅力がないのは解りきっているので大学生になっても彼氏なんてできないと思ってる優等生。控え目。

春…はる、と読みます。この人はたぶんぐいぐい行きますね。好き嫌いがはっきりするタイプだけど、気に入った子にはよく構う人。

第二話

駅前の本屋はさほど大きいものではないが、新しい本との出会いを期待するには最高の場所だ。本が好きな私は毎日のようにここに通うのが日課となっている。入学当初は財布を持ち歩いていたので目についた本を片っ端から買ってしまい、おかげで他の事にお金が回らなくなった。そのために今は財布を家に置いてくるようにしている。部活にも入っていないので放課後は真っ直ぐ帰るし、定期券さえあれば生活できるので特に問題はない。

私と先輩は特に会話をするでもなく、自由に店内を歩き回っていた。別に不満などないのだが果たして一緒に来た意味はあったのだろうか、と私は文庫本を手にながら考える。チラシを持っていたのは彼だし、一人で来て本を買えばそれでよかったのではないだろうか。そう思いながらちらりと視界に入った先輩に目をやると、彼は新刊2冊を手にして何やら悩んでいるところだった。一冊は時代物、もう一冊はミステリーだ。ミステリーはどの年齢も気軽に手に取って読めるものだが、もう一冊の時代物小説は彼のイメージとかけ離れていて私はその場で笑いを零した。隣にいた大学生と思われる男性が私をちらりと見る。その場に居づらくなった私は右足を出して先輩に近づいて行った。本を裏に帰して値段比べしている先輩との距離がだんだん縮まっていく。

「先輩、その本買うんですか？」

先ほどの図書館ほどではないが、それなりに静かな場所でききなり声をかけられたものだから先輩は一瞬びくりと肩を震わせた。そして声の主が私だと解ると少し照れ気味にどうしようかな、と言った。

「ほら、こっちは上下巻でこの厚さの割に安いんだ。でもこっちのミステリーは僕が個人的に好きな作家の新刊だね」

そうやって先輩は私に本の表紙を見せた。

時代物の方は先輩の親指が邪魔で題名の一部が見えないが、題名前半は八丁堀と書いてある。ミステリー本は私も一度友人に勧められた連続殺人事件の犯人を追う漁師の話だ。

設定から意味が解らないところがいいらしい。

「先輩は時代物とか読むんですね、意外です」

「そう？　むしろ僕はこういうのばかり置いてある棚以外は滅多に行かないだけだね」

私は、高校生だったらほとんど近寄らないコーナーだな、と苦笑する。

「よし、決めた。じゃあ買ってくるから、えっと、この店のカードどこだっけ……」

そうやって先輩はごそごそと上を向きながらポケットに片手を入れて探した。

そして、それらしきものを発見すると、あった、と呟いて手を出した。

しかし、彼が手を出した拍子にカード以外のものがひらりと床に落ちてしまった。恐らく、羽鳥さんが彼に手渡した手紙だ。

先輩もそれに気が付くとあわててそれをしまい、カードを片手に苦笑した。

「えっと……じゃあ買ってくるね」

「はい、行ってらっしゃい」

そうやってレジに向かう先輩の背を見ながら私は再び思った。

本当に、如何して二人で来たんだか。

第二話（後書き）

「鈴木の話は進まない」の法則です。

進展なんてあと5話くらいないのでは…と私自身が不安になります。

第三話

あの日から一週間は、何事もなく平和に過ぎて行った。

私はいつも通り学校へ通い、数少ない友人と会話をし、放課後は図書室に通う。

この繰り返しだった。

先輩とはあのあと普通に別れ、その後一度もあっていない。

元々服を汚したことに對して謝罪をしたかったただけだろうからこうなることは予想していたし、それを悲しく思うこともなかった。

少女マンガだと、きつとここで男の子の事を思って「解ってたけど、この胸の痛みは、何？」みたいなモノローグが入るのだろうが、それさえ感じられない。

全く、我ながらかわいげのない女だ。

金曜日、つまり今日は、一日中雨だった。

ザーザーと降る雨は台風を予感させ、私は傘を持ってこなかったことを後悔した。

駅までは最低でも歩いて20分かかるし、こうなるとコンビニでビニール傘でも買うしかないのだろうか。全く、ついていないものだ。私は昇降口まで歩いていくと、靴を履いて外の様子を伺った。

雨がどれだけ降っているかを確認するつもりだったのだが、私の目が真っ先に捉えたのはいつの間にか目の前に居た先輩の姿だった。

「今帰り？」

そう言われ、咄嗟に私は後ろを振り向いた。誰もいない。

となると彼は私に話しかけているのだろうか？ という意味で人差し指を自分に向けて指すと、先輩は笑って「そうだよ」と言った。

「雨すごいね、傘持ってる？」

「今日は忘れてきちゃって。土砂降りなのに参ってます。先輩も今

帰りですか？」

そう言って私は苦笑した。ここにいるのだから帰るに決まっているのだろうに、わざわざそんなことを聞いた自分が何だか可笑しかった。

「うん、うん、それもあるんだけど、待ってた」

「ああ、友達を」

「いや、宮野さんを」

「私を？」

はい？約束なんてしてましたっけ？という目で私は先輩を見る。確か本屋に行った日はお互い帰り際に「じゃあ」と言うだけの素っ気ない別れで終わったはずだし、それ以降は彼と会ってさえないのだから、私の記憶が正しければ約束なんてものはしていない。

「うん、メアド聞き忘れちゃったなって」

そういうって彼はおもむろに携帯を取り出すと、僕が受信する側でいいかな、と呟いた。

私は反射的に「はい」と返事をし、携帯を取り出してアドレス送信の項目を選んだ。

ところで、年齢も違い、性別も違い、ほとんど接点もない私たちがメールアドレスを交換することに意味はあるのだろうか。

「今度は僕が送るね」

アドレス帳なんて家族と片手で数えられるほどの友人のアドレスしか入っていない。

たまに業者からメールマガジンが届くことはあるが、基本的に友人の少ない私の携帯にメールなど来ない。先ほども言ったが、アドレス帳は空っぽに近い。

そこにもう一つ追加することは嬉しいことなので、ここは素直に喜んでおくのが良いのだろうと思った私は、久々に作る笑顔で彼に礼を言った。

「じゃあ、私、これで帰りますね」

そう言って私が携帯をしまい、外の世界に踏み出そうとすると、

先輩は焦って私を引き留めた。

「雨すごいからさ、傘持っていないんだったら止むまで待たない？用事があるなら引き留めはしないけど」

「止むんですか？」

そう言った私を見て先輩は少し考え込むと、あー、止むのかな？と言って笑った。

第三話（後書き）

すごく短いですがこれより先を書くとも長くなりそうなのでここで切ります。どんどん宮野が変わり者になっていく（笑）

第四話

結局雨がやむまで待つことにした私たちは、三階の一般教室に向かっていた。

校内にはまだ生徒がいて、すれ違うたびに凝視される。

私と綾瀬先輩というコンビが珍しく、同時に妙だと思ったのだろう。私でさえ戸惑っているのだから無理もない。

仲よさげに会話をしているならまだしも、無言で並んで歩く姿は不思議だったに違いない。

教室に着くと、先輩が窓際の席に腰かけたので私もその隣に並んで座った。

外は土砂降りで、先輩を責める気はないがさつき帰った方がよかったのは明らかだった。

彼自身もそのことに気付いているようで、苦笑しながら「ごめんね、雨……」と言った。

「いいえ、大丈夫ですよ、止むかもしれませんし」

自分でそういいつつ、これは絶対に止まないなと心の中で思った。グラウンドがぐちゃぐちゃになっていて、傘を差しながら歩く女子生徒が靴の汚れを気にしているのがここからでも見える。

「えっと……宮野さんは一年……だったよね？」

そう先輩が切り出したので外を見るのを中断し、こくりと頷いた。

「部活とか入ってる？」

「いえ、私は帰宅しちゃうので……。先輩は茶道部ですよね？」

「うん、知ってたんだ？」

「友達が話してて、それで。」

先輩の事を話題に出す女子は多い。

私のクラスでもよく彼の仕草がどうのこうので盛り上がっている事

がある。

私はその話題についていける気がせず、いつも一人椅子に座って夏目漱石の本を読んでいた。

「一回しか見たことないですけど、先輩、和服似合いますよね」

「……そう」

なんだかその返事が素っ気ない気がして、一瞬先輩の顔色をうかがおうと思ったのだが、良く考えたら先輩の返事はいつも素っ気ないではないか、と思い結局辞めた。

おかげで、暗いこの部屋で先輩が顔を赤くしているのを知らぬまま、私は一人、黒板を凝視することとなった。

「宮野さんはよく本屋にいるよね」

「ああ、はい。本が好きなので。お金がないので立ち読みばかりなんですけれどね」

「本、面白いよね」

「綾瀬先輩もよく行かれるんですか？ 本屋」

「うん、僕は最寄駅の方に。あと、春でいいよ。その方が呼びやすいだろうし」

「え、ああ、はい……」

いざそう言われると、何だか言いにくい。

照れくささもあるが、周りは綾瀬先輩で通っているのだ。

何だか慣れない。個人的には綾瀬で定着しているのだから逆に春の方が呼びにくいのだが、

本人が気を使ってくれたならばこちらもその呼び方をすべきだろうか。

っていうかはいって言っちゃったし。

そんな私の心情も知らず、先輩はほいほいと質問を投げかけてくる。

「どこ住だっけ？」

「鷺沼です」

「あれ、じゃあ僕と近いね。電車であったことないから解らなかった」

貴方が知らなくとも実は私は知っていたのですよ、と意味もなく誇らしげにそう思った。

同じ電車に乗り合わせる事が多く、いつも遠目に彼を見ていた私は彼が桜新町で降りることも知っている。

「そっか、鷺沼か……。じゃあ今日この後は同じ電車で帰れるね」
そう言われ、無意識に外に目をやった。相変わらずの土砂降り。

「駅までが、まず大変そうですね」

そう言って、私は笑った。素直に、駅まで走っていく私たちを想像して笑った。

人と話す事があまりない私にとってそれは久しぶりの事で、こんな些細なことで笑えるのかと少し驚いた。

雨は結局止まなかった。

私と先輩は最終下校時まで雑談をして、事務の人に傘を一本借りて帰ることにした。

先輩は駅のコンビニでビニール傘を買う予定らしい。

「すみません、なんか私だけ貸してもらっちゃって……あ、持ちますよ」

駅までの道、先輩と傘に入って歩きながら私はそういった。

「ううん、いいよ。元々買って帰るつもりだったし。あと、君が持ったら僕濡れちゃうなあ？」

そう言って先輩は笑って頬をかいいた。

初めて冗談を言った彼を見た私は不覚にもその笑顔に一瞬見とれてしまっていた。

普段は無表情なことが多いが、笑顔が格別よいと言われる春先輩。その良さを、今日の前で見た私はなるほどこりゃあ惚れるなと納得をした。

「先輩はいいんですか？ 相合傘なんてしちゃって」

「んー？ うん」

「咎める人とかいないんですか？ 別に、そういう意味で聞いているんじゃないですけど……ねえ？」

ねえ？ というのはつまり人目が気になるという意味で、咎める人というのは遠まわしに彼女と言う意味で使った。

先輩はそんな私の心境を察したのか、大丈夫大丈夫と言って笑った。「っていうか、相合傘って言っちゃうところが面白いよね、宮野さん」

コンビニに着くと先輩はビニール傘とのど飴のパックを買い、そのうちの一つを私に手渡した。

喉をやられることが多いらしく、先輩はのど飴を常備しているそうだった。

はちみつと檸檬が口の中でちょうどよく混ざり合う、おいしい飴だった。

電車はさほど混雑しておらず、

また二人で雑談を続け、桜新町で先輩が下りると私は一息つく。

まだ口の中に残っている飴を舌で転がしながら、携帯をぱかりと開けてアドレス帳を見た。

綾瀬春。

特に意味もなく名前を読んで、私は携帯を閉じた。春先輩。

関わることなど一生ないと思っていたのだが、

今日あんなに話をしてしまったものだから内心驚いている。

しかも「あの」春先輩が「この」私と、なのだから余計にだ。

いじめられてはいないものの、クラスでは若干浮いている存在の私。気にならないわけではないが、特に誰とも深くかわらないまま3年を過ごすのだと思っていた私にとって今日という日は後に、「始まりの日」となるのであった。

第四話（後書き）

あー進まないわね（笑）

第五話

やっぱり数学は嫌いだ。

月曜一限目の数学の時間は、もう少しで頭がパンクするところだった。

先輩が教えてくれたはずのところはとうの昔に頭の中からすっ飛んでいて、

しかも今日に限って教師に問題を解くように言われ、答えられず、笑われる。

朝っぱらから嫌なこと続きの月曜日を迎え、一刻も早く帰宅したい衝動に駆られたがそうもいかない。二限目は現文だし、三限目は日本史が入っている。文系の私が文系の科目を捨てられるわけがないのだ。

ポケットの中にかすかな振動を感じたのは現文の授業でちょうど寝そうになっているときの事だった。先生に見つからないよう静かに携帯を開くと、そこには「Eメール一件」という文字が見える。開いてみると、先輩からだった。まあ、彼以外に登録している人はほとんどメールをよこさないのになんとなく予想はしていたが、まさか授業中に送ってくるとは。

【今暇してる？】

暇なわけがなかるうに、と思いつつ、暇ですよと返信をするとすぐに返事が返ってきた。

きっと先輩も授業に飽きてしまっているのだろう。

【数学どうだった？解った？】

如何して先輩が私の時間割を把握しているのか、という疑問より先に、内容が全く解らなかったということに罪悪感を感じた。せつか

く教えてもらったのに全く覚えてなかったなんて言えるわけがない。ばっちりでしたよーと返信をすると、今度は5分ぐらいしてから返信が来た。

【あ、全く解らなかったんでしょ。今日の放課後また教えてあげようか？】

なんとまあ見事に見透かされたものである。嘘を吐くのが苦手だという意識は全くないのだが、そんなに文章に罪悪感がにじみ出ているのだろうか。たったの9文字を見て私の心を読み取るなんてことをしたとは思えない。要するに最初から覚えてないだろうと思われていたのだな。なるほどね。私は頬杖を突き、黒板に目をやる。古典の助動詞の活用法を習う授業程つまらないものはない。周りを見れば皆顔を机に伏せて寝てしまっていた。再び携帯のディスプレイへと視線を移し、先輩へ返事を打ち込む。送信完了の画面を確認したのち、私は携帯の電源を切り、授業に集中することとした。

「今日はとりあえず遠慮しておきます」

第五話（後書き）

短いのは…仕様です…
(、；ω；、)
(

第六話

羽鳥琴音。彼女と接触したのは、ほんの数分前の事だった。普段はおとなしく、同じような雰囲気をもったような女の子としか行動を共にしない彼女が私に手紙を渡してきたのは驚きだったし、同時に戸惑った。彼女は、数学の授業がようやく終わり安堵の息を吐いていた私のもとにやってきたかと思うと、無言でルーズリーフの切れ端を机に置いて去ってしまったのだ。紙には「放課後に405に来てください」と小さく綺麗な字で彼女からのメッセージがつづられていた。今まで一度も話したことのない彼女からそんなことを言われても心当たりがあるわけがないが、かといってむやみに断るわけにもいかないから困ったものだ。

そんなこんなで現文の授業をもやまとした気持ちを抱えたまま受け、先輩の誘いも断り、私は405号室を訪れていた。時間が時間なので生徒は部活か帰宅で辺りはしんとしていて、教室には羽鳥さん以外は誰もいなかった。

「急に呼び出してごめんね？」

そう、ソプラノのかわいらしい声で言われ私は反射的に大丈夫大丈夫と笑顔で応える。ああ、大丈夫じゃないけどね、と心の中で付け加えたが無論その声は彼女には聞こえない。

「あのね、呼びたしたのは、綾瀬、先輩の事なんだけど」「は？」

思いがけず咄嗟に出した声がちょっと強いトーンになってしまったらしく、羽鳥さんはびくりと肩を震わせた。

「ああ、うん、ごめんね、えっと先輩が？」

「先輩、彼女いるのかなあって」

「は？」

二度目の「は？」に今度は私自身が吃驚して、思わず口元を抑えた。先輩……？ 彼女……？ ところでようやく記憶の引き出しから本屋に行く前の出来事を引っ張りだした私は納得した。なるほど、確かに先輩は私と歩いていたし、最近は何かと行動を共にすることがあるから彼女は私に聞きに来たのか。

「彼女がいるかどうかは、解らない。力になれなくてごめんね」

「あああうん、いいの、いいの！ 私こそごめんね、いきなり……」

そう言った彼女だったが、まだ聞きたいことがあるのかもごもごと口を動かしながら数度私の事を見た。その様子を見て心境を察した私が、私は先輩の彼女でないということも告げると、羽鳥さんは安心したのか笑顔になって「そっか」と言った。

「あの時宮野さん見えちゃったでしょ？ 私が先輩に手紙渡したの。先輩には断られたんだけど、やっぱり、諦められなくて……。でも、相手がいないなら私にもアピールチャンスはあるんだってことが今日わかったから、本当にありがとう」

そう一方的に彼女は言い放つと、小さく手を振って駆け足で教室の外へと出て行った。一人残された私も状況がよく解らぬまま、「まあ解決したなら良いか」と気楽な事を考えて教室を後にした。先輩が交際を断ったのはまあなんとなくわかる気がする。全く面識のない人にいきなり告白の手紙を渡され、OKを出す人などよっぽど彼

女に飢えている者でなければいいだろう。同時に、だからこそこれからめげずにアピールを始めようという彼女の気持ちも解らなくはなかった。

ふと、携帯の電源を切りっぱなしにしていたことに気が付き、三階の階段付近で私は電源を入れた。すると、Eメール三件の文字がディスプレイに表示され、私は一瞬目を疑った。悲しいことに、今までにこんなにメールが堪ったことはなかった。チェックを怠っていたからではない、送ってくる人がいないのだ。私は急いで最初的一件から順番にメールを開いていく。

【あれ？ごめん、もしかして怒っちゃった？】

【今日新しい本買いに行こうと思うんだけど、部活終わるまで待てる？】

【今部室にいるんだけど、もしかしてもう帰っちゃった？】

質問攻めのメールに私は思わず笑いを零した。予想通りメールは三件とも綾瀬先輩からのもので、最後の一件はほんの数分前に送られてきたものだった。メールなんてほとんどしないから「遠慮しておきます」が怒っていたように聞こえたのだろう。顔文字でもつけておけばよかっただろうか。

私は残り数段をゆっくりと降りると、二階の茶室へと向かった。茶道部の部室の場所なんて把握していないが、とりあえず茶室に行けば何とかなるだろう。この学校の茶室は中々生徒が近寄らない奥の方の場所にあるので、私も一度や二度見かけたきりで、中に入るのは初めての事だった。

そんなわけで部室の前にやってきた私だったが、人の話し声さえせず、本当に部活などやっているのだろうかとかと心配になる。だが暫く

そうしていると「お疲れさまでした」と何人かの声が重なって聞こえてきたので、それまでミーティングか何かをしていたのかもしれない。

最初に障子の戸を開けた人物は私の知らない男子生徒だった。背丈的に2，3年生だろうか。

彼は私を見るなり目を輝かせて奥に駆けて行き、別の男子を連れて舞い戻ってきた。

「入部希望だ！ 入部するんだよね？ ね？ この人部長だから、ね？ よろしくー！」

そういうと彼は私の腕をぐいっと引っ張り部長と思わしき人物の前に立たせた。

私は何がかかわからぬまま茶室に引っ張りいれたものだから混乱して言葉も出ない。

「入部希望者？」

そう落ち着いた声で言ったのはおそらく茶道部部長の男。長身ですらっとしていて和服がよく似合う男だった。

「い、いえ……えっと、私は人探しでちよつと……」

こんなことなら素直にメール一通入れて違う場所で待ち合わせればよかったなと思ったが、そんなこと今更遅い。

「えー？ 入部しないのー？ えー？」

「健、お前はちよつと黙ってる。誰探してるの？」

「えっと、綾瀬先輩なんですけど……」

「あー綾瀬ねーうん、ちよつと待ってね」

そういうと部長は部屋の奥へと姿を消し、入り口付近に残された私は必然的に健と呼ばれたハイテンション男と目を合わせる羽目となる。

「え、なに、もしかして君、春のこれ？」

これ？というのと同時に彼は小指を立てたが、それとほぼ同時にもう一つ新しい手が後ろから出てきたかと思うと、立っていた健の小

指を折った。

「そんなわけないだろう？」

第七話

「……怒ってる？」

帰り道を無言で歩く事約4分。先輩は私の顔を覗き込みながらそう言った。

ああ、やはり怒っているように見えるのかと少々落胆しつつ、私は首を横に振る。

「……やっぱり怒ってる」

「いや怒ってませんって」

ほらあーと言いながら先輩は眉を八の字に下げた。

怒っていないのに怒っていると決めつけられてはこちらも対処の仕様がなない。

「大体、綾瀬先輩を」

「春ね」

すかさずそう言った先輩に内心苦笑しつつ私は続ける。

「……春先輩を怒る理由がないです」

「うーん、だってメールも素っ気なかったし……」

「メール素っ気ないのはいつもの事ですけど」

「自覚してたんだ？」

そう言っ先輩は笑うと、「本当に怒ってないみたいだね」と言っ安堵の息を吐いた。

「ねえ、僕も名前で呼んでいい？」

「はい？」

「健がさ、あの後やたら宮野さんの事を悠ちゃん悠ちゃんって言ってるからさ」

あの後、というのは先輩が健先輩の後ろから気配を消して出てきて、私を確認した後に奥の部室で着替えたときのことを差すのだろう。

待っている間あの部長と二人きりにさせられてしまい正直気まずい10分間だった。

「それあまり関係ないですよね？」

そう私が言うと、春先輩はうーんと笑って見せてから「そうだよねー……」と呟く。

暫くの沈黙が二人の間に流れ、私はその間ずっとコンビニの100円セールののれんを見ていた。普段百十八円のチョコレートが100円に値下げしているというのはチョコレート好きの私としては事件なのであるが、お金など持ってきていないので結局買えないだろうと目をそらした。先輩はというと、その間はずっと前を見て歩いていた。薄い髪がゆらゆらと風に揺れ、うまく言い表すことはできないが、何だか癒された。

「先輩、明日空いてます？」

無意識にそんなことを口走っていて、自分でも少々戸惑った。

「明日？ うん、放課後なら空いてるよ？」

「じゃあ、数学教えてください」

「え？」

「数学教えてください。それで私が数学の問題を20問解けたら、悠って呼ばせてあげます」

何様だお前は、と自分で突っ込みを入れるが、何故か今日は口がいう事を聞かない。

「それでいいの？」

「それでいいですよ？」

「何か、呼ばれたくないのかと思ってたんだけど……」

そう、先輩が頬を指で軽く掻きながら、上を向いて行った。

「いえ？ 別にそういうことでは……？」

「なんだ……天然か……」

落ち込んで損したよ、と呟いた先輩に意味もなく笑い返し、私たちは駅へ歩いて行ったのだった。

第七話（後書き）

悠がただのKY……（
・c
|,
・、
;）

第八話

「あー惜しい！ あと二問だったのに……」

そういうと綾瀬先輩は両腕を机の上にだらりと伸ばし、悔しそうな顔をした。昨日私が突然提案した「二十問解けたら云々」のイベントを、数時間前から図書室で開催している私達であったが、中々目標の二十問正解までたどり着かない。私からしてみれば十五問も解ければそれで十分ではないか、といった感じで、実際何度も先輩にそう言っているのだが、彼は断固として私を帰らせてくれなかった。今思えばどうしてあんな馬鹿な提案をしたんだろうか。別に名前を呼ばれることに抵抗があるわけでもないし、ましてや数学が好きなのでもない。先輩が独自の問題を作ってくれている間も、どうやって帰ろうかとそればかりを考えていた。

「ねえ宮野さん、もしかして……わざと間違えてる？」

「そんなことないです。いつでも本気ですよ」

「そう、いや、名前呼ばれるのが嫌で仕方なくって言うのなら引き下がるんだけど、そうではないの？」

「そうではないです。でももう解きたくないです」

「じゃあ駄目。はいこれ次の問題」

そう言って先輩は笑顔で自作の問題を手渡してくる。彼と向かい合わせて座っている私は、解いている間中、ずっとその視線に耐えなければならぬ。先輩だからどうだという問題ではない。誰もが一度は経験したことがあるであろう、あの視線だ。問題を解いている間に先生にじっと見られていたり、テスト中行き詰っていた時に試験官がちょうど目の前に立ち止まってしまったときに味わうあの緊張感を、私は今感じている。それも、一度や二度ではない。かれこれ四回近く問題を解いていて、その度に向かいの先輩は私（もしくは

は問題用紙）を凝視してくるために、さすがに精神的に疲れる。た
らりと汗が右頬のあたりを伝うのが解った。するとだんだん意識は
そこへと集中して行き、もう問題などぼやけて見えなくなっていま
っていた。

「大丈夫？ 暑いのか？」

そう言うとき先輩は持っていた透明な下敷きで私に風を送った。貴方
のせいで精神的に参っているんですよと口にできるはずもなく、私
は大人しく問題に視線を戻した。残り三問だ。静かな図書室に、カ
リカリとシャープペンシルの芯が削れる音が響く。窓から入ってく
るそよ風と、誰かが本のページをめくる音と、自分の出すカリカリ
という音が、絶妙な雰囲気を作り出していた。残り二問。目の前で
先輩が頬杖をついたのが解る。そこ違ふよ、という意味なのだろう
か。もう無駄にプレッシャーを与えるのは辞めてほしい。それとも
特に深い意味は無いのだろうか。残り一問。ラストスパートだ。そ
よ風が額の汗を冷やし、私は寒さと緊張感と高揚感の狭間で焦って
いた。自分が書いている数字は果たして3なのか8なのか。一問目
と比べてはるかに汚くなっている字は自分でも読みづらく、頭の中
で自身を叱った。それでもし見間違ひをして不正解になったらどう
するのよ、と。

「はい、解き終わったね」

私がシャープペンシルを乱暴に机に放り投げると、先輩はそう言っ
て問題用紙を受け取り、赤ペンを取り出して採点し始めた。その間
は目のやり場に困り、というのも採点しているところを凝視する勇
気はないし、かといって図書室のどこを見ればいいのかもわからな
かったのだ、結局両手を膝の上でもじもじと動かして気を紛らわせ
ていた。やがてカタリ、と先輩がペンを机に置く音が鼓膜に響いて
も、やはり私は未だに顔を上げられずにいた。

「悠ちゃん」

その温かさのこもった一言で、私はハッとして顔を上げる。
そして急いで彼の手から問題用紙を奪い取ると、紙が破れる程の力で握りしめた。口元がゆるゆるになっっていくのが自分でもわかる。
そのゆるゆるな表情のまま、ゆっくりと顔を上げる。

そこには、ゆるゆるな表情の先輩がいた。

「いやあ、でも三時間お疲れ様でした」

「本当に、私、三時間、頑張った」

「うん、頑張ったね」

帰り道、疲労と解放感でいろいろな感情が入り混じっていた私はボ―っとしながら先輩と歩いていた。夏が来たことを知らせているのか、六時だというのに辺りはまだ明るい。

「でも、これで晴れて悠ちゃんを悠ちゃんって呼べるね」

「宮野でいいと思うんですけどね」

「健だけずるいでしょ。ずっと呼び方変える機会伺ってたのにあいつ初対面からあんな呼び方したからね。あとで絞ってやらないと」
そういうと先輩はにっこりと笑って見せた。

「だから別に変えなくていいじゃないですか」

「いいや、苗字って呼びにくいもの。距離感じるから名前の方がい

いでしょ」

私は別にそうは思わないしむしろ貴方の事も綾瀬先輩って呼びたいんですけどね。と言いたいのをぐっとこらえて私は次の話題を探す。

「もうすぐ夏休みですね」

「そうだね。悠ちゃんは何か予定あるの？」

「いえ、特にないです。去年までは祖母の家に行ったりしていたんですけど、高校上がってから休みも短くなっちゃいましたし。先輩は何か予定あるんですか？」

「僕は部活だけかな。お茶会が数回あるだけで、特に大きな行事は無いね。今年は暑いし、海とか行ってみたいなあ」

そう言う先輩は「んー」といいながら両手を上に挙げて伸びをして、私の方を見た。

じっと見られているだけでは癪に障るので、私もまた先輩を見返した。視線がぶつかり、無言の時間が続く。その間も、夏の日差しは雲に隠れることもなく、私たちに降り注いでいた。後頭部が日に当たって暑い。

「帰ろうか？」

そう言う先輩はにっこりと笑うと、私を置いて駅の方へと歩き出した。置いて行かれまいと（いや、別に置いて行かれて困ることはないのだが）私も早足で先輩を追いかける。さっきの間は何だったのだろう、という疑問は、私たちが駅に着くころには蝉の鳴き声にかき消されてしまっていた。

第八話（後書き）

ほわー長かった。いや短いんですけどかいてる時間は長かった。今度こそ更新続けられるかな？

第九話

朝。私はいつも通り、東急線を使って学校へと向かい、授業開始の40分前には教室に到着した。誰も居ない教室の窓を静かにあけ、カーテンが風に揺れるのをうっとりとした目で見ながら自分の椅子に腰かける。自分以外は机と椅子、そして大きな黒板しかないこの空間は言ってみれば誰も知らない私だけの世界だった。ほんの2、30分しか味わえないこの柔らかな世界を、私はとても気に入っていた。

目を瞑って風の音に耳を澄ましていたところに、最初に入ってきた人物は高野瀬俊介だった。出席番号14番。サッカー部のエースらしく、朝練から丁度帰ってきたところらしかった。彼は私を見つけるなり、毎朝するのと同じく小さく笑って会釈をすると、荷物だけ置いてまた外に出て行った。これもまた、恒例行事のようなもので、この後の約10分間はおそらくであるが誰も入ってこない。私は静かに鞆から文庫本を取り出すと、しおりのはさんであったページを開き、黙々と文字を目で追い始めた。

いつも通り20ページほど進んだところで、ちらほらと女子が教室に足を踏み入れだし、教室がにぎやかになってくる。おはよう、と声を掛けられ、おはよう、と小さく返す。そして、また本の世界に戻る。彼女たちも、そうしていつも通り去っていく。はずだった。

「み、みやのさん！」

突然そう声を掛けられ、私は本を読むのをやめ、首を右方向に向けた。

そこに立っていたのは、羽鳥琴音だった。

「おはよう？」

「お、おは、よう！」

「どうしたの？」

「あ、あのね、えっと、今日一緒に！ お昼、食べてもいい？」

は？と言いつつもなるのをごらえて私は羽鳥琴音をつま先から頭のてっぺんまで見た。特に変わった様子は無い。彼女は一番大人数の女子グループに属しているために、昼はいつも別々で食べている。その彼女が、何故私と？

「もしかして、ハブられたの？」

「えっちがうちがう！ ちがうの！ そうじゃなくて！ えっと、特に大きな理由があるわけじゃないんだけど……」

「私弁当じゃなくていつも食堂だし、それでもかまわないのなら、別にいいよ？」

「本当に！ ありがとう！」

羽鳥琴音はそういうと嬉しそうに顔を赤らめ、走り去って行った。それから、私と一緒に弁当を食べて何の得があるのだろうか、と考える。もしかすると、彼女は先輩に会いたくて私と弁当を食べたいと言ったのではないだろうか？ 生憎、先輩とは別々にお昼を食べているわけだが、それでも知らずに期待している可能性は十分にあるだろう。というか、もうそれしか理由がないのではないだろうか。そう考えると、安易に彼女と弁当を食べる約束をしてしまった自分を叱りたくなる。期待させるだけさせて、お昼になったら目当ての人がいないんだなんて、あんまりではないか。しかし、はっとして後ろを振り向いてみても羽鳥琴音の姿はもうなかった。

昼。私は悶々と二つの選択肢について考えていた。一つ、先輩を誘

うという事。どうせ食堂に居るんだろうし誘えることには変わりないが、友人と食べているところを引っ張っていくのは少々いたたまれない。却下。二つ、理由を話して丁重にお断りする。これでもよいのだが、別に一緒に食べることに不満があるわけではないので言いにくい。却下。ああもう、結局決まらないじゃない。

「宮野さん！」

その声が後ろの方で聞こえたのを合図に、悠は目を瞑って深呼吸をした。

なるようになるさ。

私はメロンパン、先輩は味噌汁とおにぎり三つ、羽鳥さんはおにぎり二つを持って食堂の椅子に腰を掛けた。結局、先輩を誘ったのかと聞かれれば答えはNOになる。一緒に食べないかと誘ったのは先輩の方だった。カタリ、とお盆を置く音がしてそのあとすぐに先輩が座った。私と羽鳥さんは少々戸惑いながらも、先輩方とは反対側の椅子に腰を掛けた。そう、私たちは「先輩方」である、茶道部メンバーの昼ごはんはんに誘われたのだ。

向かいの左から順に、部長の佐竹一先輩、副部長の武石結衣先輩、そして先日話しかけられた風見健先輩、と春先輩に笑顔で紹介され、私は曖昧な笑顔を返す。こちら側は左端から春先輩、羽鳥琴音さん、そして私だ。如何して向かいが例の先輩なんだよと内心ムツとしていたが、半面で仕方ない仕方ないと自分を宥め、気持ちを落ち着かせていた。ちらと隣の少女に目をやれば、緊張して仕方がないのか、手でぎゅっとスカートを握っていた。まあ、隣が春先輩では無理もない。

「まあまあ、堅苦しい雰囲気は無しにして！ 食べようぜ！」

そう、健先輩がいったのを合図に、皆が自分の昼食に手を伸ばした。それでもやはり羽鳥琴音だけは、ぎゅっとスカートの端を握って下を向いてしまっていた。

「いやーしかもつたいない！ 悠ちゃん茶道部っぽいのに入ってくれないなんてなー」

そう言いながら、健先輩はメロンパンを手でちぎって口に運んだ。案外上品な食べ方をするのが面白くて、私はにやけそうになるのを防ぐためにせっせとおにぎりを口に詰めた。

「健！」

「なんだよーいいじゃん。部活入ってないんでしょ？」

「はい、まあ」

「その辺にしとけ、健。困ってるだろ」

そう言っただけ部長は健先輩を軽く睨んだ。間に挟まれた武石先輩が居心地悪そうにしているのが傍から見てもよく解る。

「ごめんね、二人とも。僕が急に誘っちゃったから」

そういつて春先輩は苦笑する。どちらかというと、うつむいている羽鳥さんに向けられた言葉のように聞こえた。同じように、私も羽鳥さんに似たような謝罪をすると、彼女は小さく首を横に振り、今度はこちらを向いてにへら、と笑った。

「私ね、本当は宮野さんとお弁当食べたかったの。ずっと」

「え？」

「宮野さんはね、すごい人だなあって思ってたの。ほらね、私どんくさいでしょ？ だから、中学の頃はうまくグループに入れなくて、たまにね、本当にたまにだけど、陰口とかも言われてて。だから、高校入ったら皆と一緒に行動して、みんなに合わせてお話ししなきゃって思ってたの。でもね、暫くして気づいたら、宮野さんいつも一人で。それなのに、すごく堂々としててね、格好いいなあって」だからずっと、お友達になりたかったの、と再び俯いて羽鳥さんはぼそりと言った。

私はというと、文字通り目が点になっていた。

「それだけ？ 私とお昼食べたいって言った理由、それだけ？」

「へ？ そうだよ？」

そう言われ、午前中の悩みは何だったのだと少々肩を落としたのと同時に、安堵の息を吐いた。てっきり先輩目当てだと思っていたのに。まさか、そのような事を羽鳥さんにおもわれていたなんて夢にも思っていなかった。

「え、なに？ 悠ちゃんってハブられてるの？」

「健！」

「お前はよくもまあそう無神経な事をホイホイと言えるな」

「は？ 俺なんか今まずい事言った？」

そう健先輩と春先輩、部長の三人が話しているのを見て、まあいいか、結局彼女に不快想いはさせなかったみたいだし、と私は自分を納得させ、最後の一口をほおばった。すると、斜め向かいに座っていた武石先輩と目が合う。そう言えば、この人さっきからひと言も喋ってないな、と思ったのと同時に、先輩の口がゆっくりと開いた。

「ねえ、もしかして、宮野さんって……葵先輩の妹さん？」

第九話（後書き）

ふー進まない！

第十話

宮野葵というのは、私三つ上の兄の事だ。あおい、という名前のために小学校で出席を取るときから女の子に間違えられる兄さんだったが、れっきとした男だ。今は近くの大学で医学を学んでいる、自慢の兄さん、といったところだろう。寮暮らしなのであまり会うことはないが、それでも一ヶ月に一回はメールを出して近況を確認し合う程仲は良い。

私の家庭はそれほど裕福なわけではなく、母は早くに他界し、父は海外で働いて子供である私たちの学費を払ってくれていた。つまり、余裕ぶった顔をして外を歩いている私も、生活面では正直いっぱいいっぱいだった。文庫本も買ったらずに売り、そのお金をためて新しい一冊を買うという行為を繰り返していたのだが、最近の本を見て面白そうだな、おわり、というのが日課だ。本は図書館のものを借りればお金はかからないし、何より中学の時と違って食堂で弁当を買わなければならなかったことが理由で無駄なお金を使いたくなくなってしまったのだ。

先ほども言ったように、兄さんは寮暮らし、父は海外なので、私は学校から少し離れたワンルームマンションに一人で住んでいる。兄さんが大学生になる前は、このワンルームに二人、窮屈な暮らしをしていたのだが、今になって部屋を見渡してみれば、酷く広く感じる。医学部に行くために猛勉強していた兄さんだったから、家の中には本がたくさん置いてあったし、課題のプリントが散乱していることも珍しくなかった。その一枚一枚を綺麗に拾い上げ、兄さんの机の上に戻しておくのが、中学校から帰宅した私が最初にすべきことになっていった程だ。

そんな兄さんは、高校にいたころ、茶道部に入っていた。私の通っている高校に、兄さんも通っていたのだ。私がここを志望した理由の一つでもある。兄さんは部活熱心で、3年になって引退してから、勉強の合間に暇を作っては学校に出向いて茶道部の生徒と一緒に茶の時間を過ごしているような人だった。今は流石に学校訪問というわけにもいかないらしく、大人しく大学のサークルでお茶を飲んでいるらしい。

そんな兄の名を、武石さんは先ほど口にした。

「ええ、そうです。妹の悠です」

「そうなんだ……貴方が……」

「葵兄さんに妹がいるって、ご存じだったんですか？」

「うん、よく話題に出たからね。妹は僕の茶が飲めないんだよって」
そう言って武石さんはふふ、と笑う。対して、私は口元をひきつらせていた。

その言い方は、なんというか卑怯ではないか、と思ったのだ。

私は兄さんの茶が飲めないのではなく、お抹茶が苦くて飲めないのである。それがどこぞのお茶の先生が入れた極上の抹茶であろうが、素人の抹茶であろうが、兄さんの抹茶であろうが、飲めないものは飲めないのである。味なんて大して変わらないだろうに、というのが私の本音だ。

「えー！ 何、悠ちゃんってそうなの？ 葵先輩の！？」

「例の抹茶嫌いの妹さんっていうのは、君の事だったのか」

そう言って、部長までもが薄く笑顔を浮かべるので、私の顔はほとんど下を向いて行く。

茶道部部員にそんなこと教えた兄さんにはあとで仕返しを用意しなければならぬ。

「私達、賭けてたのよ。貴方が今年茶道部に入るか、入らないか、

で」

「賭け……?」

「そう。私達はしきりに＜絶対に入らない＞の方に賭けていたのに、健だけ＜入る＞の方に賭けていてね」

そう言うのと、武石先輩は何かを思い出したかの様にクスリと笑って健先輩に目をやった。当の本人は「ギクリ」という効果音が合いそうな表情をしている。

「いやあ……ほらあれは……ハハハ」

そう言うのと健先輩はその場から逃げるように席を立とうとしたが、隣にいた武石先輩にシャツをぐいと掴まれ、結局動けずじまいになる。

「健、言ったよな? 負けた奴は茶道部員に一本ずつジュース奢るって」

そういうと部長はニヤリと笑って健を見た。健先輩はやっぱり覚えてたかーと苦笑すると、財布の中身を確認して再び苦笑する。

「本当にやらなきゃダメ?」

「駄目だよ、約束は守らなきゃね、健?」

そう、笑顔でとどめを刺したのは昼食中「健!」ぐらいしか言っていなかった春先輩だった。

昼食後、私と羽鳥琴音は二人で午後の教室に向かって歩いていた。

「ごめんね、何か、私ばかり話してた気がする」

「ううん! いいの! 私も聞いてて楽しかったし! それに」
「?」

「あの時は言えなかったけど、やっぱりね、正直に言うのと綾瀬先輩に会いたくてお昼誘ったっていうのもあったの。もちろん、宮野さんとは話してみたかったし! 友達にもなりたかったんだよ! そこは信じてね。私、宮野さんとはいいライバルになれるって思っ

てるから」

「え、いや、ちょ……」

相変わらず一方的にものと言った彼女は、笑顔で手を振って去って行ってしまった。一人廊下に残された私は、苦笑しながらその様子を見送った。なんだ、やっぱり先輩がいてよかったじゃない。けれど、私は別にライバルになる気はないんです。ご自由にお持ち帰りくださいよ。そう頭の中で言ってみても、当たり前だが羽鳥には届いていなかった。

第十話（後書き）

ちよつと短かったですね…！ははは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207o/>

私のごく普通の恋愛話

2011年5月23日12時50分発行